

北九州市立

藍島小学校

校長名： 白木 浩一

児童数： 3名

Ⅰ 研究主題

「ふるさと藍島 Study」を中心に据えた教育活動の推進

～ Ⅰ.島で生きる誇りと喜び Ⅱ.街で生きる学力とコミュニケーション能力の育成 ～

2 重点目標

○「ふるさと藍島 Study」について

本校の学校行事や総合的な学習の時間等でこれまで取り組んできた体験活動について、特に地域とのつながりが深いものを精選し、「ふるさと藍島 Study」とした。それらの活動の目標や内容を「Ⅰ.島で生きる誇りと喜び」「Ⅱ.街で生きる学力とコミュニケーション能力」の育成と関連付けながら再編・統合し、年間カリキュラムを作成した。「ふるさと藍島 Study」での探求課題の解決を通し、ふるさと藍島を愛し、豊かな心とたくましく生きる力をもった子どもの育成を目指す。

研究2年次の本年度は、ACCUユネスコアジア文化センター作成の「教師向けルーブリック（17の評価要素）」の中から昨年度の実践をもとに①主体性、②意思決定力、③コミュニケーション能力、④困難を乗り越える力、の4つを重点要素に選定し、目指す児童の姿を明確にして各単元、行事に取り組んだ。以下に主な取組の概要を示す。

3 概要

事例Ⅰ：第4・6学年 総合的な学習の時間

「海岸清掃」「スナメリウォッチング」「魚釣り・干物づくり体験」「河内小交歓会」

ふるさと藍島の美しい自然を守るため、島内や海岸の清掃活動を年間を通して定期的に行っている。海岸漂着物については、昨年度の調査時と同様にプラスチック製品が大半を占めていることが分かった。漁師である保護者に協力をいただいて、集めたごみは漁船で本土の集積場へと運搬している。その際、島を周回して近海に生息するスナメリの観察を併せて行った。本年度は気候が良く、海面を跳ねながら泳ぐ2組の若い群れに遭遇でき、児童は歓声を上げながら観察した。

現在の島の産業は漁業のみであり、家庭での日常の食事では、岩場で採った海藻類や波止で釣った小魚などを食べるのが多く、来島者の中心も釣り客である。そこで、児童にとっても身近なアジやサバの干物をつくろうと、自分たちで釣りに行くことにした。計画に際しては、後に行く「河内小交歓会」において、山の学校の児童に説明して体験させることを見通して、役割を分担した。竿や仕掛け等の必要物品、帰着後に釣った魚を捌き干物にする準備を自分たちで行い、波止ではまったく釣れない時間帯を堪え、後半で入れ食いとなる潮との関係を体験した。包丁を使って魚の頭を落として腹を開き、内臓を取り出し洗って干す作業でも、児童はためらいなく次々に捌いた。

河内小交歓会では、全校3人の児童で18人の児童とその保護者を案内し、説明して体験を楽しんでもらうことができた。単に道案内して説明するだけでなく、目的に即して様々な相手と会話をし、性別・年齢・嗜好などが異なる多様な相手とコミュニケーションを図ることができた。



事例2：第4・6学年 総合的な学習の時間

「Love 藍ランドプロジェクト」「離島子ども交流会」

守りたい、紹介したい、ふるさと藍島の見どころについて児童が話し合い、来島者へのおすすめポイントとして案内板を作成することにした。島内8箇所に絞って分担を決め、アクリルボードにイラストと説明文を載せて、それぞれのポイントに設置した。「Love 藍ランドプロジェクト」として関係者に案内状を送り、パンフレット「あいしまっぷ」を配布して招待した来客を連れて島内を案内した。また、毎年の運動会で発表しているソーラン節や藍島盆踊りを披露し、楽しんでいただいた。

県内の8離島、藍島・相島・大島・玄界島・地島・姫島・小呂島の小中学校で、学習活動や環境改善の交流を行っている。その一環として、直接交流が困難な各島の児童が顔を見て話し合う「離島子ども交流会」をオンラインで開催することとした。画面上でゲームをしたり、島の様子や学校の取組を発表し合ったりすることを通して、同じく島で学ぶ仲間の姿に共感し、安心感や一体感をもつことができた。



事例3：第4・6学年 総合的な学習の時間

「藍島盆踊り」

藍島では、古くから8月14日に親戚一同が島に集まり、夜を徹して無形重要文化財「藍島盆踊り」を行う風習がある。この伝統を受け継ぐため、地域の保存会のご指導の下、6年間を通して月に一度、太鼓・三味線・口説きの練習に取り組んでいる。その成果を保護者・地域の方々を招待した「TIK 楽しい・芋・絆祭」で発表した。児童の演奏を囲んで島の方々に踊っていただき、「上手になったね」「少なくなっていく若い人が受け継いでくれてうれしい」「一緒に踊れて楽しかった」という島の方々の声に触れ、伝統を受け継いでいくことへの意欲と責任感を高めた。



4 成果と課題

① 成果

実践の度に児童・教師で振り返りを行いながら、変容と課題を共有してPDCAサイクルに活かしていくことで、年間を通じて継続・発展的なカリキュラムに随時修正してきた。取組の内容により中心的な目標・評価要素は異なったが、個としても、相互のかかわり・集団としても、各取組の中で努力し高まる児童の姿が見られた。

ふるさと藍島についての学習では、計画から準備、発表まで、必要な支援を行いながらも、できるだけ児童自身に考えさせ、任せることにより、責任感と主体性をもって最後までやり遂げる姿が見られた。学習後の児童アンケートでも、「ふるさとを大切にしたい気持ちや、島で生まれ育ってよかったという気持ちが強くなった」と、全児童が肯定的に回答した。学習を通して「I.島で生きる誇りや喜び」を体感させるとともに、自己の変容や高まりを自覚させることができたと考える。

また、他校との交流活動においては、事前にGIGA端末を活用してオンライン交流を行った上で実際の直接交流を行っていったので、関係づくりがスムーズにでき、互いに楽しく会話や活動に取り組むことができた。児童のICT活用能力や大勢の前でも臆することなく発表する力も高まっている。これらのことから「II.街で生きる学力とコミュニケーション能力」の育成についても、一定の成果を上げることができたと考える。

② 課題

オンライン活用により、交流や外部講師による授業など、離島における学習環境は大きく進化した。一方、少人数で各種多様な取組を計画・調整・実践する業務分担の工夫が求められる。